

日本中世の出産の光景と病の看護

田端泰子

一 中世の医療と出産

日本の中世という時代は、おおよそ十二世紀の末から十六世紀の後半までの約四百年間をいう。日本歴史上の時期区分では、鎌倉時代・室町時代・戦国時代を中世と呼ぶ。

出産の実態を検討する前に、まずは中世の政治形態と医療について概括的にみ、次いで出産についての先行研究を検討しておきたい。

日本の古代には、天皇を頂点とする貴族階級が人民を支配していた。古代律令制下では、病氣治療と投薬を担当する部署として、太政官に典薬寮が置かれ、医官丹波氏和氣氏らが皇族や貴族に対して病氣治療に当たっていた。医官の治療においては、医学と薬学が未分離であったことは、『源氏物語』において、「くすし(薬劑師)」と呼ばれていることによってもわかる。その時治療に際して準拠したのが、中国から經典と共に輸入された医学書である。その輸入医学書をもとに、日本で初めて編纂・著述されたのが『医心方(いしんぽう)』⁽¹⁾である。この本は

丹波氏が著述したもので、十世紀の終わりに三十巻として完成し、天皇に提出された。この本には病の治療法から病後のケア、薬の使い方などが、隋・唐時代の中国の医学書を百冊以上豊富に引用しつつ記されている。ただこの書物は天皇に差し出されたあと、六百年もの間天皇家に秘蔵されていたので、一般社会の目に触れることがなく、公刊されるのは、江戸時代の後半期になってからである。このことが、日本に医学の知識が普及しなかつた理由の一つであると考ええる。

古代の終わりに、武士階級が発生する。彼らはそれまで中・下級の貴族でありかつ地方の役人を務めていた。武士階級は被支配階級である農民の支持を得て、新たな支配階級にのし上がった。鎌倉時代には、鎌倉を首都とする武士の政権と、京都を首都とする天皇と貴族階級の政権との、二つの政権が並んでいた。

武士階級が打ち立てた新政権が鎌倉幕府である。その初代将軍は源頼朝で、正妻は北条政子である。鎌倉幕府は源氏の将軍が三代にわたって継承したあと、将軍の「宿老」(重臣)であった北条氏らが政権を担当する政治形態つまり「執権政治」に移行した。いっぽう京には

天皇家を中心とする公家政権が荘園制を基礎に存続していたので、鎌倉時代は公武二重政権の時代であったというほうが正確である。また家族関係では武士においては「家父長制」家族の形態をとっていた。家族成員中では、夫や父親に最も大きな権限があったが、妻は夫に従属した存在ではなく、夫との対等性を持つ第二の家父長であった。そして日本の中世の終わりまでは夫婦別姓であった。

武家政権においては医療に関する職制は特に置かれなかった。京都の公家政権においては律令制以来の典藥寮が存続していたが、他の部署と同じく丹波氏・和氣氏・惟宗氏・中原氏がそれぞれの「家」の家職として医療を継承しているという、「官司請負制」という形態に転化していた。そのため公家の九条家から鎌倉將軍となつて鎌倉に下向した頼経が飲水病（糖尿病）に罹つたとき、京都から六人の医官が下向して、代わる代わる八ヶ月間治療に携わつた。⁽²⁾

室町時代には、武家政権たる室町幕府が天皇と貴族の政権を吸収して大きくなり、公武にまたがる最高権力者の位置を獲得したが、弱体化したとはいえ、天皇家の権威は中世を通じて存続した。この室町幕府は公家政権をも吸収して成立した政権であったので、典藥寮の機能を幕府の中に部分的に吸収し、病氣治療や出産時に典藥寮の役人を活用している。

「家職」として医療を継承してきた丹波氏なども、それぞれの家で工夫を重ねつつ個人の力量を磨き、医療行為を行っていた。そのため丹波長直が従三位、和氣（半井）明茂が従二位など、高位に叙される例が生じた。

また室町期には医官の家より身分の低い僧体の医師が誕生するようになる。後円融天皇の咽喉痺を治療したことで有名な坂士仏（上池院）⁽³⁾は、丹波氏や和氣氏が治せなかつた天皇の病を、針治療して完治させた。

このように医療行為が一部の医師以外に広がった背景には、鎌倉期以来往来物と呼ばれる教科書が普及し始め、公家や武士だけでなく、庶民上層にも手の届くものになったこと、その往来物に健康・医薬の知識などが散りばめられるようになったこと、その往来物に健康・医薬の店や薬種商が現れ、薬種を扱う座が登場し、医師以外の公家などの求めにも応じて調剤するようになったからである。

戦国時代には、室町幕府が解体したので、戦国諸侯と呼ばれる武士が政治を主導する群雄割拠の時代になった。

戦国時代から織豊政権期にかけては、中国の明からの医学が日本に紹介された。中でも竹田昌慶（明室）は応安二年（一三六八）に明に渡り、金扇道士から医学を学び、「牛黄円」製作の秘法を授けられ、一〇年後に帰国したとき、「銅人形」をもたらしした。人体模型である。昌慶はその後足利義満に仕えた。これ以後渡明して医学を学ぶ日本人が細々ながら続き、下総古河で医療活動に従事した田代三喜などを生む。三喜の臨終まぎわに秘訣を伝授されたのが、曲直瀬道三であるとされる。⁽⁴⁾

戦国期の足利將軍家は吉田淨忠（盛方院）・竹田定珪（瑞竹軒）・半井驢庵（春蘭軒）・半井瑞策（通仙院）・祐兼坊（祥寿院）琇存らを侍医としていた。曲直瀬道三は京都上京に「啓迪院」を開いて医療と教育を

行い、「啓迪集」などの医術書や本草書を著している。道三の考えは、一党一派に狹めて医学を継承しようとするものではなく、広く「慈仁」をもって万人の病を診るといふものであったので、多くの門下生が集まり、優秀な門弟を多数輩出した。⁽⁵⁾ 道三自身は足利義輝・正親町天皇・毛利元就・織田信長・豊臣秀吉などの病を診察している。

このように戦国期以来、医師は京において数多く輩出しはじめたので、戦国大名は京で名を挙げた彼らを招いている。大内氏は竹田氏を、北条氏は半井氏を、大友氏は吉田氏を招き、毛利元就は先述のように永祿九年（一五六六）、京から曲直瀬道三を出雲洗合あわわに呼び、治療だけでなく、若い医師の養成にも携わらせている。

以上中世の政治と医療従事者の関係を概観した。ここで気がつくことは、女性の出産は平産を前提として考えられているため、出産そのものは「病」とは考えられていないということである。中世の出産はむしろ「穢れ」との関連のなかで研究がなされてきた。その代表的な研究に、瀬川清子氏の『女の民俗誌』⁽⁶⁾がある。氏は鎌倉期の「文保記」が出産のけがれを第一にあげていることから説き起こし、注連縄しめなわは産屋うぶやのけがれを封鎖するものであったのではないかとし、安産祈願・不浄除けの御符として「血盆経」⁽⁷⁾信仰が定着したという武見説に賛同している。

歴史学の分野からの中世の出産に関する研究はまだ少なく、一九八六年に保立道久氏が「出産の情景―巫女・ウブスナ・後ろ抱き」⁽⁷⁾を発表して以後のこととなる。ここではじめて出産という行為自体が宗教観と切り離されて研究の俎上に上った。その後穢れについての森本仙

介氏の研究が出され、新村拓氏は『出産と生殖観の歴史』⁽⁹⁾を、杉立義一氏は「御産の歴史―縄文時代から現代まで」⁽¹⁰⁾を出版している。こうして、穢れ研究とは独立しての出産研究も開始された。

しかし森本氏・新村氏・杉立氏の研究には「女性性」からの視点が無いと批判する加藤美恵子氏は「中世の出産―着帯・介添え・産穢を視座として」⁽¹¹⁾を出して、再度穢れとの関連を視野に入れ、出産禁忌や産穢の拡大は「家」の確立・展開期にきつくなる、と述べる。

本稿では右のような研究史の流れの上に立って、穢れの問題は一端切り離し、出産の実態を明らかにすることを目的に、出産時にそれに関わった人々の役割究明にも力点を置いて論じようと思う。

中世には看護を専門の職業とする人はいなかった。助産師もおらず、助産婦が「産婆」という名称で、歴史に登場するのは、江戸時代である。では看護師も助産師もおらず、医師が極端に少ない時代に、庶民は病気やその看病、また出産の場面で、どのような行動をとっていたのであろうか。第二章で中世の初めのころの、將軍家の出産の場面を取り上げ、出産に関わった人々がどんな役割をもっていたかを考える。

第三章では中世後期の將軍家のお産が、家臣や女房によつてどのように挙行されたのかを検討し、第四章ではこれら中世の出産の前例となる平安期の中宮のお産について考察し、中世の出産の状況に何が引き継がれたのかを考える。そして第五章では戦国時代の上層武士の家の後家を主人公に、日常の交友関係の中で、病にどのように対処していたかについて述べてみたい。

二 北条政子の出産と乳母の選定

北条政子は鎌倉幕府の最初の将軍である源頼朝の正妻である。先述のように、中世の終わりまでは夫婦別姓であったので、彼女は源姓ではなく北条姓、あるいは北条氏は大きい姓氏の分類「源平藤橘」では平氏に入るので、平姓で呼ぶのが正しい。つまり北条政子または平政子が正しい呼び名である。彼女の生涯のうち、大きな事件についての記録は『吾妻鏡』に記されている。『吾妻鏡』は鎌倉幕府の公式記録である。武士階級の動向や武家政権の推移を記録した『吾妻鏡』に、女性の生涯の重大事件が記されていることが注目される。その理由は北条政子が夫の死後、夫のやり残した事業を引き継いで、完成させたからである。彼女は鎌倉幕府の確立に、夫と共に貢献したので、死後彼女の業績を讃え、人々は政子を「尼將軍」と呼んだ。

北条政子は生涯に四人の子供を産んでいる。このうち、長男頼家と次男実朝を出産した時の様子が、詳しく『吾妻鏡』に記されている。そこで長男頼家出産の時の記録に基づいて、出産の状況を考察する。

一一八二年二月、政子の懐妊が周りの武士たちに知らされた。すると夫である武士の棟梁頼朝は、懐妊を喜んで、罪人に恩赦を与えた。

また、政子のために、鶴岡八幡宮の参道を築造させた。⁽¹³⁾政子の参詣を容易なものにするために、というのは表面上の理由で、源氏一族の尊崇する八幡神を祀る鶴ヶ岡八幡宮の寺格を一気に高め、併せて東国武士の源家への臣従を意図したものと考える。この参道は現在「段葛」⁽¹⁴⁾

と呼ばれ、参詣する人々が歩く道として利用されている。

着帯は三月に行われ、御家人千葉氏の妻が献上した腹帯を、頼朝が自ら政子に結んでいる。⁽¹⁵⁾

次いでお産が近づくと、普段住んでいる住居とは別に「御産所」を決める。これには有力御家人の邸宅が宛てられ、以後この習わしは室町時代の将軍家においても引き継がれた。頼家出産時には比企谷にあった比企氏邸が「御産所」に宛てられた。七月十二日、政子は輿に乗って「御産所」に移っていった。⁽¹⁶⁾

いっぽう頼朝はお産の総指揮を、梶原景時に行わせることを決める。⁽¹⁷⁾梶原氏も有力御家人で、頼朝の信頼の厚い人物である。將軍の正室政子のお産を、男性家臣が監督するという体制であったことが注目される。つまり政子のお産は、私事ではなく、公式行事として頼朝が命じて、御家人層をあげての行事として取り組まれたことになる。

政子のお産が迫った八月十一日、頼朝は政子のいる比企谷の比企氏邸に移る。夫が妻のお産を見守る態勢がつくられていることがわかる。いっぽう全国の御家人たちは、続々と鎌倉に集まってきて、「御台所」政子のお産を今か今かと待っている。頼朝は妻の安産を願って、近隣の有名な神社に、次々に使者を派遣する。政子の側には、安産となるように祈るための修験者二人が呼ばれた。魔よけのため、お産の時に「破魔弓」⁽¹⁸⁾を鳴らす「鳴弦役」と鎗矢を射る「引目役」⁽¹⁹⁾には、有力御家人が選ばれた。弓弦を引いた時の音や、鎗矢が飛んでいく時の「ブーン」という音が、魔よけの力を持つと、中世の人々は信じていたからである。



図1

これらの男性たちが政子の周りにいた。『吾妻鏡』には男性だけが政子のまわりには描かれていない。しかし武士階級の女性たちが多数、幕府の女房として幕府に仕えていたので、当然政子の出産の時にも、これらの女房たちが介助のために、かいがいしく働いていたと思う。『吾妻鏡』に政子のすぐそばにいた女房の行動が記載されていない点にこそ、御台所の出産とはいえ、出産が男性御家人の目には直接触れない営みであったことを証明すると考える。

女房たちの中で『吾妻鏡』に登場し、大きな役割を与えられていたのが、「乳母」である。頼家誕生時にも、授乳のために「乳付」(ちつけ、ちちつけ)という名で登場する。乳母は予め選定されており、河越重頼の妻(比企尼の娘)が呼び出され、出産と同時に参上している⁽¹⁷⁾。絵巻物に描かれた貴族の出産場面などでは、巫女が祈祷している。

例えば「北野天神縁起絵巻」では簾の中に産婦がいて、彼女を抱き抱える女性や、砂を撒く巫女も簾の中にいる様子が描かれている⁽¹⁸⁾。(図1参照)しかし政子の頼家出産時には巫女は登場しない。男性修験者が祈祷の声を上げ、弓や矢がうなる音のなかでの出産であったことが記されるのみである。武家の棟梁の出産であるため、男女の武士たち、特に多くの男性に取り巻かれての出産であったのだろう。但し、男性は出産がなされた部屋にはおらず、隣の部屋で祈祷し、軒下の縁側から庭に向かって弓を引いたのであろう。男性御家人はお産の準備と進行を司り、女性御家人は女房として、出産を介助した。このように男女で役割を分担していたと思う。

一般の女性のお産の場には、巫女が呼ばれて修験者のかわりに祈祷

したが、裕福な層では修験者が主となって巫女と共に祈祷するのが普通であったと思う。將軍の正室政子のお産に巫女の記載がないのは、鎌倉の武士の棟梁の正妻のお産であるため、巫女は必要とされず、その役割は出産の場の外にいる男性修験者や御家人が務めたためであり、出産介助は幕府の女房が務めたためであったのだろう。しかし、男性御家人たちが出産の前から鎌倉に詰めかけて、さまざまな役割をもつて出産に参加していたことは、動かすことのできない事実であったことを、強調しておく。

八月十二日、北条政子は頼家を出産した。⁽¹⁹⁾ 安産であった。

翌八月十三日、「代々の佳例」(これまでの代々の出産時の祝賀の事例)に倣って、頼朝は御家人から「守り刀」を進呈させる。嫡男誕生時には武士の家では、家臣がお祝いとして刀を進呈するのが前例であったからである。この時、刀を進上した御家人は、宇都宮氏、畠山氏、土屋氏、和田氏、梶原氏、横山氏の六人である。いずれも後に「宿老」と呼ばれる重臣たちであった。その他の御家人たちは、お祝いに馬を献上する。馬の数は二百匹にも上った。これらの馬は頼朝によって、近隣の主要神社に奉納された。産後の「五夜」「七夜」「九夜」の祝いも、御家人たちが準備し、御家人たちが祝福して、行われている。⁽²⁰⁾

以上述べてきたように、源頼朝の正妻である北条政子は、男女の御家人に見守られ、祝われて長男頼家を出産した。現代の出産の光景と比較すると、産児を取り上げる専門職としての助産師や、産婦人科医師は存在しなかったことが明らかとなる。『吾妻鏡』は鎌倉後期に男性御家人によって記された記録である。そのため政子の出産時の様子

では省かれた部分、見えていない部分があることが推測される。おそらく、政子の側に仕える女房たち(侍女たち)が新生児を取り上げ、政子の産後の世話をしたと思うが、史料には書き残されていない。

以上検討してきた政子のお産に特徴的な事柄は、第一に多くの男性家臣たちがお産にかかわっていたこと、第二にお産時に最も重視されたのは、乳母の選定であったことである。総監督、鳴弦役、引目役は有力御家人が務めた。男性の修験者が安産を祈った。御家人たちは、政子のお産が近づくと鎌倉に集まり、出産を待ち、男子が生まれると祝いの品を主君頼朝に進上した。このように、政子のお産は、御家人たちが待ち望み、見守るなかで行われた。棟梁の正室(御台所)のお産は、古代末期以来の武士階級の先例に倣っておこなわれた。お産は多分に儀式化された順序を踏んで行われていたといえる。

日本中世の出産についての歴史学からの研究は、多くはない。その中で代表的な見解は、保立道久氏の「公開された出産」という主張である。氏は絵画資料としての「融通念仏縁起」の出産場面を取り上げ、緊迫した出産が「通りに面した公開の場で、一つの風景の中で行われている」と読んだ。⁽²¹⁾ しかし私見では先の「北野天神縁起絵巻」において産婦は屋内のさらに御簾に覆われた空間で、女房や巫女と思われる女性たちに囲まれて出産していたことはあきらかであり、決して公開の場ではないと思う。

また保立氏に取り上げられた「融通念仏縁起」の出産場面は、念仏による難産からの救いをテーマとして絵画化されたものである。(図2参照) お産をしているのは牛飼童の妻という、庶民クラスの女性で



図2

ある。出産する場面（畳の上）の前には、板の間を挟んでもう一つ畳の敷かれた部分があり、そこには念仏を唱える僧牀の男性が描かれている。念仏の功德によって難産によって死にそうになっていた産婦が救われたという場面を表すためには、本来家の中の出産場面を、通りに面した部屋で、しかも外から見える場面として描く必要があったと考える。つまり、出産そのものは「公開」されていたのではなく、屋内で男性の目には触れないかたちでなされるのが一般的な光景であったと思う。『吾妻鏡』で政子がまさに頼家を出産する場面の記述がないのは、『吾妻鏡』記述者のような男性御家人の目には触れないかたちでの出産が通常の形態であったからだと思う。

一般にお産の時の祈祷を巫女が担当していたことは、絵画資料に多く残っている。前掲の「北野天神縁起絵巻」（鎌倉前期の一二二九年ごろ成立）でも、産婦の側で撒砂をしている巫女の姿が、簾の内側ではあるが、くつきりと描かれている。縁側には弓を持った烏帽子の男性がいて「鳴弦役」をつとめ、同じく縁側で産婦の夫は小坊主から祈祷の巻子を受取り、庭では陰陽師が祭文を読み上げている。夫の受けとった巻子と、巫女、鳴弦役、陰陽師は、共に祈りと呪術によって悪霊を祓い、出産の安全をはかるためのものである。神と仏の両方の力を借りて安産を願う姿がここにはある。したがって祈祷を担当する僧侶、陰陽師、巫女は、出産には不可欠の存在であった。特に庶民クラスの女性が出産する場合には、陰陽師や鳴弦役はおらず、寺から巻子をもろうことはなくても、巫女は祈祷のためには必要とされたと思う。しかし「融通念仏縁起」（一四世紀前期に成立）の出産場面には、巫女の

姿は見えず、産婦のいる一角の向いに僧が一人いるのみである。それはこの僧が産婦を念仏衆の一人に導いたことをアピールするために、この場面が描かれたためであろう。出産の介助は、この絵巻物にあるように、庶民クラスでは近隣、親族の女性たちによってなされたと考えられる。

ここで確認しておきたいことは、巫女は右に述べたように出産時の祈禱を担当する女性であって、産婆を務めたことは絵巻物からは読み取れないという点である。保立氏は「枕草子」二五九段の、巫女は「ちごの祈りし、腹などとの女」といわれたとある部分から類推して、巫女が産婆を兼ねていた、とされる。しかし巫女の第一の役割は安産祈禱であつたと思う。逆に「ちごの祈り」こそが巫女本来の役割であつたことがこの部分からわかるのではないだろうか。

また保立氏は「とはずがたり」の著者後深草院の二條の二度目の出産に際しては、夫が腰抱きをしたことを紹介し、「男が腹を取つた」このような出産は、民衆においては多かつただろうと述べている。

出産時に産婦を抱き抱えて出産を容易にする風習があつたことは確かである。鎌倉期に記された「文保記」にも「他人のために腰抱と号す」人がいたことが記されている。産婦は抱き抱えられたり、天井から下げられた紐や綱を握っていきむ風習があつたことも、絵巻物などに示されている。産婦を抱くのは通常は女房や親族の女性であつただろうが、「とはずがたり」の二條の二度目の出産時は様子が異なつていた。次に二條自身がこの出産をどう語っているか見てみよう。

この時の夫・新生児の父は「雪の曙」(実は西園寺実兼)である。主

人公後深草院の二條は中院雅忠の娘で、二歳の時、母(大納言典侍)が亡くなったため、四歳で後深草院のもとに参つたという、院の養女のようにして育ち、後深草院の側室的立場になつた女性である。実父中院雅忠は二條が十五歳の時に亡くなつてゐる。十六歳の時に最初の子(皇子)を出産した。文永十年(一二七三)のことである。この皇子は翌年亡くなるが、その死の十五日ほど前に二番目の子を出産する。子供の父はこのたびは「雪の曙」である。実兼には正妻に二人の女子がすでに生まれてゐた。二條の二回目の出産時の「とはずがたり」の原文は次のようになつてゐる。

火ともすほどよりは、ことのほかに近づきておぼゆれども、ことさから弦打ちなどもせず、ただ衣の下ばかりにて、一人悲しみあたるに、深き鐘の聞こゆる程にや、余り堪えがたくや、起き上がるに、「いでや、腰とかやを抱くなるに、さやうの事がなきゆへに、とどこほるか。いかに抱くべき事ぞ」とて、かき起こさるる袖に取りつきて、事なく生まれ給ぬ。

二條は院の皇子を生んでいた手前、この第二子が西園寺氏の子であることを公にできなかった。それで、鳴弦も行わず秘密裡に出産したのである。西園寺実兼が「お産のときは腰を抱くというが、このようなことがないために生まれにくいのか、さあ抱いてやろう」と二條を抱き起こしたので、その袖に取り付けて平らかに生まれた、と表現している。

つまりこの場合は夫(新生児の父親)が抱き起こして出産を介助していたことがわかる。これは人目をはばかる秘密の出産という特異な

出産で、生まれた女兒は実父実兼が連れ去った。通常の出産とは全く異なる連例のお産であつたのであり、鳴弦すらないという異常な出産である。したがって、この例をもって男性の腰抱きが存在したと一般化できないと考える。

因みに二条の最初のお産は文永十年、十六歳の時のことであつたことは前述した。皇子誕生にふさわしく、叔父にあたる大納言四条隆頭が「取り沙汰」(惣指揮)をし、隆頭邸が御産所となり、御室で愛染王法、鳴滝で延命供などが修され、叔母の京極殿が後深草院の御使いとしてやってきて、皇子の父君後深草院から佩刀を頂くなど、皇族の誕生の礼式に準じてなされた。鳴弦が行われ、詳しくは書かれていないが、乳付けも決まっていたようである。

三回目の出産は弘安四年(二二八二)二条が二十四歳の時のことであり、実父は「有明の月」こと性助法親王(後嵯峨院の子)である。この時も後深草院の目をはばかつての出産で、院から、生まれた子を死産した院の愛妾のもとへ渡すよう云われていた。十一月六日有明の月は立ち会つてはいたが、「心知るとち二三人」(事情をよく知っている侍女二、三人)に囲まれて男子を平産している。周りにいて出産を介助したのは二条の侍女(女房)であつたことがわかる。

さまざまな出産の事例が存在することからみて、出産を介助したのは、公家や武家では女房が行い、庶民層では親族や近隣住民の女性が行い、巫女が出産の場にいるときは祈禱とともに介助をなす場合もあった、と結論づけるのが妥当であろう。巫女の本来の役割はあくまで「ちごの祈り」つまり、安産祈禱であると考えられる。巫女が産婆を兼ね

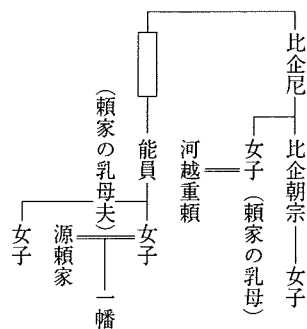
るのは、特殊な場合に限られたと思う。また男性の腰抱きも稀な例といふべきであろう。

次に乳母について考察する。出産が慣例や儀式を尊重するかたちでなされたとしても、出産時に決定された乳母は、その時の政治状況を色濃く反映して決定された。出産時に、頼朝・政子夫妻が最も人選に注意を払つたのは、乳母と乳母夫の人柄と家柄であつた。

中世の乳母はさまざまな役割をもつていた。新生児に授乳し、養育し、その後は教育としつけを担当する。そして育てた若君(養君)が成人した後は、後見役を務める。普通、母親の出産は安産であつても、身分の高い公家や武家においては、母親が生まれた子に授乳する習慣がなく、乳母を付けるのがよい習慣だと考えられていた。そしてこの乳母は授乳時にもみ役割を持つていたのではない。乳母は養君を子供のころから育てる養育者であり、教育者であり、成人後は後見者となつて、養君を生涯支えた。教育役(教師)、後見役は乳母の夫を意味する「乳母夫」が担うことも多かつた。したがって乳母夫妻と養君の関係は擬制的親子関係であるといえる⁽²⁵⁾。

このように、乳母や乳母夫は生まれてきた子供にとって、きわめて重要な役目を果たしたので、両親は慎重に乳母を選定した。頼朝夫妻の場合、家臣の中で、有力で、信頼でき、将来末永く子供の後ろ盾になるだろう家を選び、その家の乳児を持つ女性を乳母にし、その一族中の最も有力な人物である男性を、乳母夫に決めた。乳母夫は必ずしも乳母の夫である必要はなかつた。

頼家の乳母に選ばれたのは、御家人河越重頼の妻で、比企尼の娘で



比企氏略系図

ことは珍しくなかった。

乳母が決定されたのは、頼家出生直後である。おそらくそれまでに慎重に人選が検討されたことであろう。これに対して乳母夫が登場するのは、出生から二カ月後の十月十七日である。²⁶⁾ 乳母に比べて乳母夫の決定は後回しでもよかったことがわかる。

乳母夫はこれ以前の古代の終わり・平安時代には、一般に乳母の夫が務めていた。乳母は夫婦で養君を支えた。妻が授乳や養育を担当し、夫は教育や後見を担当した。乳母の家の中で役割分担をしつつ、養君を育てた。

しかし鎌倉初期の頼家の場合、頼家の乳母には比企尼の娘が任命されたが、乳母夫には比企尼の甥の比企能員が任じられている。尼の娘の夫河越氏も有力御家人であり、乳母の夫として不足はなかった。頼朝の乳母が比企尼であり、頼朝は幼少時以来比企氏を篤く信頼していた。そのため、頼朝・政子夫妻は、比企氏が、生まれた子の後見役としてふさわしいと考えたに違いない。将来にわたって頼家を支え続け

ある。比企尼は源頼朝の乳母の一人で、四人の頼朝乳母の中でも最も頼朝が信頼していた人物である。

したがって頼朝―頼家父子は、比企尼―その娘という、母―娘を乳母としたことになる。このように、二代、三代と同じ家の母―娘―孫娘が同じ主人の家の乳母を務める

てくれる武士の家として、比企氏を選んだと考える。頼家成長ののち、乳母夫比企能員の娘が養君頼家の妻になっている。その娘と頼家の間の子が一幡である。頼家の嫡男である。²⁷⁾

このように、頼家誕生時に乳母・乳母夫に決められた比企氏は、一族を挙げて頼家を支えることが義務づけられた。比企氏とその娘という母―娘が、二代にわたって源氏の乳母になった。その理由は、頼朝を育ててその不遇時代に懸命に頼朝を後見した比企尼の功績に感謝する頼朝が、嫡男頼家に対しても、比企氏一族が、一族を挙げて支援することを期待したからである。

三 室町期の将軍家のお産

前章で検討した北条政子の出産は、鎌倉期武家政権成立時の武士階級のお産の実例である。また後深草院二条の出産は、鎌倉期の公家女性本人が語るお産の実態である。この政子の出産の状況は、中世後期(室町・戦国期)において変化したのかどうか次の問題となる。したがって本章では、『御産所日記』²⁸⁾、『御産之記』²⁹⁾を史料として、将軍家の出産がどのような手順でなされ、どのような人々がお産に関わったのかを検討する。

『御産所日記』には、寛正四年(一四六三)、文明一八年(一四八六)、永祿三年(一五六〇)年の年号が本文中に見えるので、本書は中世後期を通じて書き継がれ伝えられてきた記録であることが知られる。また『御産所日記』と併せて伝存する『産所之記』の後書きに「右以伊

勢貞春蔵伊勢守貞陸自筆本写之」とあるので、両書は室町幕府政所執事伊勢氏に伝えられた書物であったことが確定できる。

伊勢氏は室町將軍家の政所の執事を務める傍ら、將軍家の後継者を養育してきた。足利義政の實子義尚は伊勢貞親夫妻を「御父、御母」と呼んでいる⁽³⁰⁾。伊勢氏夫妻は乳母夫婦というより、養父母に近い存在であったと考えられる。こうした將軍家に最も近い位置にあった伊勢氏が、公務遂行のために後世に家職を伝えるために書き残したものが、右の二書であったと思う。伊勢氏は江戸時代「故実家」「礼法の家」として幕府に仕えたのは、このような公務記録を伝承してきたためである。

『御産所日記』は將軍足利義教時代の將軍家の出産（義教第一子義勝の誕生時）について最も詳しく書き表しているので、その出産の状況を検討することにする。

義勝の誕生は永享六年（一四三四）二月九日の寅の刻のことであった。父は足利義教、母は日野重光の女重子である。御産所は鷹司西洞院の波多野元尚邸である。そこに出仕し奉仕した役人は次の人々である。

随役人
御引目役 伊勢盛経
海老名持行
鳴弦役 設楽貞助
惣奉行 二階堂之忠
右筆 松田貞清
医師 大膳亮守家⁽³¹⁾

陰陽頭 在方・有重兩人

義勝は義教の嫡男であり、正室三条氏から生まれた子ではなかったが、義教の後継者となつて將軍家を継いだ。したがつて北条政子が頼家を産んだ状況と同じであつたとみてよいだろう。お産の場面に現れる人々は基本的に政子の出産場面と同じであるが、医師が加わっている点のみが異なる。中世後期には医師の数は鎌倉期より増え、將軍家の出産にあつて待機する伝統が確立していたものと見てよい。

誕生の日には、將軍が御産所にやつてきて、白の直垂で「胞衣緒」を結んでいる。そのために「竹刀」を準備した惣奉行二階堂之忠も白直垂でことに臨んだ。引き続き行われた初夜の祝いは、將軍が出資した五百疋の銭で政所が準備し、若君に銀劔一腰、生母と上臈にそれぞれ「練貫一重、引合十帖」、「御乳人」に「練貫一」が「引出物」として進呈された。そのほか役を務めた「役人」七人に、「一重」宛下賜があり、守家には馬一匹が、下され、「可利帝母」には伊勢氏が「御太刀」を一腰奉納している。つまり出産当日「御袋」（生母・日野重子）の出産の現場にいた女性は上臈女房と「御乳人」（授乳の乳母）であつたことが、引出物を与えられた対象者がこの三人であつたことからわかる。しかし出産に立ち会つたのはこの二人の女性だけであつたのではないことは、後に述べる。

翌日十日に、「御守刀」を前にして三宝院の加持があり、この日から七日間三宝院は本坊で佛眼法の加持に入った。そのための料足は三千疋である。また「河原御祭」も七日間毎夜奉行され、在方卿が河原で行っている。この代官は伊勢貞国が白直垂で務め、撫物⁽³²⁾として直垂

が準備された。在方卿には「御馬一疋」「御太刀一腰」が進上されている。

十一日に「御湯始」があり、お祝いは政所が準備。費用五百疋が下された。この日に三寶院満済が加持を務め、「御厄形」は在方が進上している。新生児の入浴の際にかぎず「虎頭」や湯具は沼田氏が進上し、「御湯」の後で、管領その他の役人が太刀を進上して祝った。

この十一日に「御胞衣蔵」が奉行される。「胞衣おさめ」については前稿で義政代の富子の寛正六年（一四六五）出産時の「胞衣おさめ」について考察したことがある。³³富子出産時よりも詳しく記述されている部分もあるので、永享六年のこの記述を再度検討してみたい。

日野重子が義勝を産んだ時の「胞衣」は、まず伊勢貞国が洗っている。この洗い方は念の入ったもので、清水で七度洗い、酒で三度洗い、その後酢に浸し、そののち白布三尺で包み、その上を赤色の絹で包む。その嚴重に包まれた胞衣を、「太平」の字のある錢三十三文、筆一管、墨一丁と共に壺に納め、吉方の山に壺ごと納める。このときの役は

「典葉卿」（典葉頭の誤りだろう）と伊勢貞国が白直垂で務めている。

二人が帰参したとき、若君の時は馬一疋と太刀一振が、姫君の時は「一重」が典葉頭に下され、伊勢氏には太刀一振が下されるのが慣わしであったと記される。なお胞衣納めの道具（桶、壺、布など）は沼田氏が準備した。

その後三夜、五夜と産後の行事は続くのである。鳴弦役などの男性役人の務めは産後三〇日間に及び、お産所に「三十カ日昼夜祇候」したとされる。中世後期の出産行事は前期に比べて長期化していたこと

がわかる。

この出産時の記述、胞衣納めの記事からは、出産に対する「穢れ」の存在とそれを避けようとする強烈で意図的な行為が存在したとは考えられない。たしかに出産時に母子の死という危険が存在し、中世後期には一般的に「穢れ」観念が中世前期より肥大化していることは確かであろう。その拡大しつつある穢れを避けるために、またそれよりもまずは安産祈願、新生児の健やかな成長と母親の健康回復が先決だと考えられて、陰陽師と僧侶によって一心に祈られたのではないだろうか。出産時の祈祷は安産と母子の安泰を願って祈祷がなされたのであり、穢れへの畏怖や祓いは明確には史料に書き残されていないことを確認しておきたい。この祈りは産後七日からは延命法・金剛童子法・泰山府君法などに変わり、北斗御祭も修された。つまり中世前期には僧侶と陰陽師の役割であったが、中世後期には、主として、醍醐寺の満済のような將軍家の護持僧の務める役割に変化していたこともわかる。

將軍家のお産においては、右にみたように、公式的には男性家臣と男性の僧侶と陰陽師によつて執行され、費用は「公方」つまり將軍家や幕府から出されて公的行事としてなされたことがわかった。中世後期の將軍家のお産においても、生母以外の女性で出産当日から記録に見えるのは上臈と乳母だけである。しかし出産時の介錯は女房たちが行ったと考える。その理由は、当日の記述には出現しないが、五日目に管領から引出物が進上されたとき、「上臈」には「練貫一重」「引合十帖」が、「御女房達」三人にそれぞれ「練貫一重」と「檀紙十帖」

が、「御乳人」にも同量が、「御腰懐」にも同量が与えられているからである。出産当初から初めの五日間の役目に対する報酬であろう。上臈から腰抱までの下行物に大きな差はないから、すべて女房たちの役割分担であったと見てよい。つまり中世後期の將軍家の妻妾の出産においても、現場に立ち会って新生児を取り上げるのは上臈中臈など女房たちであり、腰抱きも女房が務め、授乳のために乳母も待機していたが、「総奉行」や引目役、鳴弦役、右筆、医師、陰陽師といった男性の「役人」は、御産所内の隣室または庭先でそれぞれの役目を果たしたと考えられる。

四 平安期中宮のお産との比較

中世前期の北条政子の出産、中世後期の室町將軍家の妻妾のお産について二・三章で検討した。これらの出産は武家政権のトップに位置する將軍家の出産である点で共通性をもっていた。そのために、時代による変化が理解できた。ただ共通して見えなかった部分がある。それは、二・三章の公務記録の著者が男性であったと考えられる点である。出産の現場に立ち会った女性ではなかった点に、史料制約がある。もしお産に立ち会った女房の日記が残っていれば得難い史料となるのであるが、中世においては管見の限りそれはない。したがって出産の現場に立ち会わなくても、女性の女房が書き表した日記があれば、男性の目には触れない側面が描かれているかもしれないと予測される。したがって本章では中世武家政権成立以前ではあるが、平安期中宮

彰子の出産の場面について記した『紫式部日記』⁽³¹⁾を検討し、武家政権の將軍家のお産と天皇家のお産との異同、また書き手の性差の違いによる視点の差について明らかにしてみたい。

『源氏物語』の作者紫式部は寛弘二年（一〇〇五）のころから左大臣藤原道長の娘で一条天皇中宮彰子のもとに出仕している。もともと式部は父の友人にあたる藤原宣孝と婚姻したのだが、夫が亡くなったことにより彰子に女房として仕えたのである。彰子は藤原道長の娘で十二歳で入内し、翌年（長保二年・一〇〇〇年）中宮になった。先に入内して中宮になっていた定子は皇后となったので、二后並立という事態をむかえたことは有名な事実である。そして彰子は二十一歳のとき最初の子を出産する。彰子や藤原道長一族にとっては、待ちに待った皇子の出産である。この様子を書き残したのが『紫式部日記』である。この子は敦成親王で、後の後一条天皇である。記念すべきこの慶祝事を、『源氏物語』の作者として名声を博し始めていた紫式部に記録させることで、盛大な誕生時の藤原氏一族の繁栄のさまを、後世に残すという意図をもって、道長は式部を書き手に起用したと考える。

敦成親王の誕生は寛弘五年（一〇〇八）九月十一日、藤原道長邸「土御門殿」でのことである。出産に先立って行われたのは、道長による中宮の受戒である。「御いただきの御髪おろしたてまつり」とあるが、形の上だけ剃髪をしたということである。この「髪おろし」の儀式以前から、法住寺の僧など多くの僧が屋敷内で五壇法という大法を修して読経の声をあげており、道長の子息や甥、道長の娘の乳母など多くの俗人も詰めかけていたが、髪おろしのあとは、一段と読経の

声があがつたという。出産が始まろうとするとき、女藏人や彰子の側にいる女房には、各人に一人ずつ延暦寺の僧など阿闍梨が付いていたのだが、声もかされるほど「ののし」っている。これは「物のけ」を招き寄せて祓うための祈祷であった。

九月十一日の正午ごろ、彰子は平産で男子を生んだ。『御堂関白記』⁽³⁵⁾にも「午時、平安に男子産まれ給ふ」と記されている。道長は早速僧、医師（くすしと読まれる）、陰陽師に布施や禄を与える。お産の祈祷に呼び集められた僧侶には二種あり、以前より毎月の「御修法・読経」に呼ばれている僧と、「昨日今日召しにてまいりつどひつる僧」があつたという。道長の、娘の安産を願つての意気込みが感じられる。僧らに禄を与える傍ら、産婦のそばでは「御湯殿の儀式」の準備がなされる。

新生児の臍の緒は屋敷の主道長によつて竹刀で切られた。「御乳付」は橋三位徳子、「御乳母」（おんめのと）は「もとよりさぶらひ、むつまじう心よいかたとて」中宮女房で、「大左衛門のおもと」という藤原広業の妻が任命された。誕生直後の重大人事は乳母の選定であつたことがここでも示される。敦成親王の乳母は三位の位を持つ高い身分の女性であつたことがわかる。この「乳付」は授乳ではなく、乳を含ませるのは形だけで、新生児の口の中を清めるのが主たる役割であつたとされる。実際の授乳は、昔から道長邸に奉仕してゐて気心も知れている、正直な広業の妻が行つたのであろう。実質的な乳母は広業の妻、形式上の後盾を期待しての乳母が橋徳子であつたと考えられる。

午後六時頃に寝殿南廂側に設けられた湯殿で「御湯殿」が挙行される。火をともして、中宮職の男性職員たち（六・七位の者）が、深緑・浅緑の袍を着て準備した台、桶に、中宮女房がお湯を入れうめたりして赤児に湯を使わせる。女房たちは六人が忙しく白い装束に湯巻きを付けて働くのである。きれいになると、新生児を道長が抱いて、佩刀をかかげる女房、虎の頭をかざす女房を先に進む。邸内の南庭には「うちまき」を「投げののし」る公達、漢籍を読む書博士や「弦うち」（鳴弦役）をする五位六位の者がいて、「弦うち」は二十人が二列に並んで行つたという。

三日目の夜の「御産養」^{（おんぶやしなひ）}は中宮職の男性職員によつて準備され、上達部、殿上人が列席して行われた。五日目の夜の「殿の御産養」は、道長主催の祝宴であり、女房八人が白一色の装束を着て、台盤を運んでいる。三十余人が招かれていたという。その後七日目、九日目と祝儀は続くのである。

北条政子の出産時、室町將軍家の出産時に比べても大勢の職員や女房、公達、僧侶が中宮の出産に部分的ではあるが参加していることがわかる。そこまでは日記から知られるのであるが、肝心の中宮彰子のお産の様子については全く語られず、「平産」としか紫式部も記していないことがわかる。つまり出産の場面は女房たちにも伺い知れない室内の場のできごとであつたことが確認される。

中宮の出産は、道長邸で行われた。御産所が別に設けられたのではなく、彰子の実家で行われたこともわかつた。多くの僧侶を動員し、陰陽師や医師、書博士を祇候させ、悪霊を祓い清めて「弦うち」も

二十人を揃えて、大法を修めることによってまた祈祷によって、神仏の加護のもとお産を安全に終わらせ、新生児の健康を保証した。これだけ大がかりな祈祷態勢はおそらく藤原道長だからできたことであろう。道長の大きな力によって、彰子は無事敦成親王を産んだといえる。道長の時代にはまだ出産は神仏の力でコントロールできるものであり、喜びでこそあれ、「穢れ」に圧倒されることはない時代であったといえよう。

本章の終わりに、穢れが鮮明に登場する以前の時代の、「妖」についてふれておきたい。中宮彰子のお産に先立つこと約八十年、藤原穩子が村上天皇を生んだ時のことについて検討する。穩子（八八五—九五四）は醍醐天皇の中宮で、朱雀、村上両天皇、保明親王、康子内親王の四人の子を産んだ人である。穩子は四条大路南、東大路東の「東五条殿」で村上天皇を出産している。しかしこの御産は難産であったので占ったところ、御産所の「下」に「厭者」があるということであった。捜したが厭物があつたわけではなく、床板の下に「白頭姫」が梓弓の折れたのを持っていた。その姫を追い出すと御産はすぐに平らかに終わったという。この姫の処置は、藤原忠平の命で尋問せずに「追却」と決まった。この処置について世間は「仁化之美」と称賛したという。この件について『政事要略』³⁶は「妖不勝徳、可知有驗欵」と結んでいる。つまり出産に危険はつきものであり、その危険は妖怪の力が勝っていたときに生じるのであるが、妖怪も「徳」や「仁」の力にはかなわない、したがって儒教的徳政・仁政が行われれば、妖怪は祓われると考えられたと思う。このように、難産は「妖」の存在に

よつておこる現象であるが、「徳」や「仁」また『紫式部日記』に見られたような僧侶の祈祷によつて、安産を邪魔する妖怪は、制御できるものと、平安期の人々は考えていたと思う。

御産についての「穢れ」観念は、『延喜式』³⁷に「凡觸穢惡事應忌者、人死限三十日、（自葬日始計）、産七日」とあるように、平安期には出産の日から七日間は神事に携われないとの観念があつたようである。出産の穢れについては、現在はまだ史料収集が不十分であるので、後考を期したい。

五 戦国期の日常生活の中での病の看病

出産の介助はある程度予定することができた。そのため出産は周囲の人々から祝福され、介助の役割分担も予め決めることができた。しかし病の看病については、現在のように、看病の態勢が整えられていたわけではない。医師はいたが少数であり、天皇家や摂関家、將軍家それに戦国大名には呼ばれたが、戦国大名クラス以下では医師の診察を受けることは稀であつた。

では、病気にかかったとき、中世の人々はどうのように病に向き合つて生活を送つたのであろうか。医学の知識、薬学の知識、また看護や介護の知識は、中世の知識階級である僧侶や貴族たちが、漢籍を通じてまたその他往来物などの本を読むことによつて獲得し、それを知人たちに分け与えている。これが中世の実態であつた。中世の武士の後家と僧侶との交流を検討するなかで、病の看病や薬のやりとりについ

て、またその背景について考えてみよう。

戦国時代の大和国（現在の奈良県）では、多くの有力在地領主が割拠していた。彼らは「こくじんりょうしゅ 国人領主」と呼ばれた。そのうちの一人が「と 十市氏」である。大和国では、中世の初め以来、興福寺が守護を兼ねていたので、興福寺が大和一国を支配した。寺院が守護として大和一国を支配するという、中世日本の中でも、特殊な地域であった。その大和の国人領主十市氏の妻と興福寺の僧が本章の主人公である。彼女の夫は十市遠勝といい、十市城と龍王山城をもっていた。十市氏は同じく大和の有力国人領主である筒井氏とも婚姻関係を築いていた。彼女は夫の死後十後とうごと呼ばれ、今井に住む。十後には二人の娘がいたが、男子はいなかった。十後は十市氏の再興をはかるといふ命題も背負った。長女ははじめかつての敵である松永久秀と婚姻した。しかし十市氏の再興のため、同じ国人領主の布施氏の新二郎と再婚し、新二郎を婿養子とした。長女と婿の新二郎の間に男子が誕生したので、ようやく十市氏の家は戦国期に存続することができた。⁽³⁸⁾

その十後は興福寺の高僧英俊と、若いころから親しくしていた。後家になってからの十後と英俊の交流をみてみよう。天正九・十年（一五八一・二）の兩人間の交流を、英俊の日記（『多聞院日記』⁽³⁹⁾）から抜き出すと次のようになる。

天正九年

正月二日 英俊が十市氏に手紙を出す。

七日 英俊が十市新二郎（十後の長女おなへの夫）に銅錢三十

疋、十後に酒・とうふ・昆布を贈る。

十日 十後から英俊に樽代（酒代）五十疋、新二郎より扇三本を頂く。

二月九日 十後は英俊を介して絵を誂える。代価は米二斗である。

十二日 英俊は右の絵を二斗五升で（絵師に）描かせ新二郎に渡す。代金は引き換えに払う。

三月三日 十後に頼まれた塗りの重三つが出来上がってきたので、英俊は十後に渡す。

四月十五日 十後は多聞院に参り、この日今井に帰宅。

五月一日 十後からくす玉二十丁が到来。先の絵の代金、箱の塗賃合わせて一石四斗を十後から受けとる。馬のことを十後に頼む。

三日 馬を十後が用意。人夫一人は寺から出す。

五日 十後が注文した箱が塗上がる。

十六日 筒井氏の後家と十後が多聞院に参籠する。

十七日 祝儀の品を貰ったので、十後に遣わす。

十九日 十後に豆の飯2重、白8升を贈る。

二十一日 参籠している十後の祓を行う。

二十三日 十後は近日、瘧を煩い、歩行が困難なのに、乗り物には乗らないで歩いてきた。懇懃至極である。

二十三日 十後が参籠から帰宅した。

二十九日 十後が、去年九月に預けていった皮籠を取りに来た。

六月九日 十後は英俊に唐瓜十を贈る。

十四日 十後から預かった本尊（仏）に風を入れる（風通しをす

る。

十五日 十後の屏風に風を入れる。

十八日 十後は筒井に帰られた。

七月 (中略)

八月十七日 十後より目薬を一貝わざわざ贈られる。

(中略)

十月二十二日 十後方から本尊などを取りに来る。雨降り故渡さな

かった。

二十三日 十後方から本尊を取りに来た。阿彌陀三鉢、卒塔婆二

本を渡す。三尊の表補代は米二石、卒塔婆代は三斗。

(中略)

天正十年

二月十日 十後は昨日から奈良に来ている。家を買取った。

二十六日 十後へ(食物を)一鉢持って「見廻り」に行く。

二十八日 十後は筒井へ行った。

(中略)

四月六日 十後から、京へ米を運ぶ船のことで使いが来たので、

木津の者に伝える。

十五日 十後は木津の船で京まで二十五石を上す。そのため

船二艘を雇ってやった。

五月二十一日 十後から、先日、堺の塩風呂に入ってきたといつて、

みやげとして砂糖・茶碗が到来。

(中略)

八月二日 十後から手紙が来たので、明後日見舞いに行くと申し

つかわす。

四日 十後へ「見廻り」に行く。人夫三人を三升ずつで雇う。

酒樽以下費用は合計一石五斗余りであった。午刻に帰る。

(中略)

十一月十三日 十後を見廻る。

(後略)

右に引用した天正九年と十年の記事には、瘧おろと呼ばれた病と眼病が登場する。瘧は現代のマラリアであり、蚊によつて媒介される。窪地や水溜まりがいたるところにあった時代であるから、マラリアはよく発生したと考えられる。室町期永徳三年(一三八三)、後小松天皇の生母厳子が瘧病を煩い、典薬頭和氣邦成と施薬院使和氣広成が灸治療をなし、湯薬を投与して、効果が現れたことがあったと『後愚昧記』⁽⁴⁰⁾に記されていた。しかし十後の瘧に対する治療に関する記述はない。眼病と同じく、一般に知られた薬があったのであろう。この時代に曲直瀬氏、半井氏、吉田氏などの有名な医師がいたが、曲直瀬氏や吉田氏が診察するのは、天皇家、豊臣家、徳川家や上層の公家、武家に限られていた。十市氏が医師にかかったという形跡はない。武士階級でも国人領主クラス以下は、知人である僧侶や公家という知識階級から、薬を手に入れるというかたちで、病に対処していたと思う。

今井にいた十後と奈良の多聞院英俊の日常の交流にはさまざまな側面があった。以下にまとめて述べよう。

第一に、節季ごとに祝いの品を贈ったり贈られたりする関係が続いていたことがわかる。このような贈答の慣習は中世のあらゆる階層で見られた。

第二、十後の娘と婿養子新二郎の間に子供が生まれると、英俊からも祝いの品が届けられたように、特別の慶事があつたときにも贈り物がなされ、返礼も必ずなされている。特別の祝いはもちろん怠らないのが中世の人々の常識であつた。

第三に、奈良のお寺に十後が参籠するなど、英俊のテリトリー奈良に十後が入ってくる時には、英俊は十後の世話を心を込めて焼いていることがわかる。米を運ぶための船を英俊が世話をしたこともある。船を都合するために英俊が仲介役をつとめたのである。こうした英俊の好意・便宜供与に対して、十後は返礼をしたり、この年の記事ではないが、寺への奉仕活動を行つて、この好意に応えている。

第四に英俊の仲介は文化の面でも見られることが知られる。絵を絵師に描かせたことが記載されていた。別の年の記事には、『源氏物語』の表装を十後に頼まれた英俊が、経師にやらせ、自ら源氏の系図を書き添えて十後に贈つてることが記されている。

第五に、この時期は十市氏の不遇時代であり、戦乱と当主の死によつて、城も領地も失うという運命に見舞われていた。そのため本尊、屏風や『源氏物語』などの貴重品から皮籠まで、十後は英俊に預けている。これに対して英俊は、預り物に風を通したりして、こまめに世話をしている。

当時の寺院は広い敷地の中に建物が点在していた。どこか寺の一角

で火災が起こつても、瓦で葺かれた屋根を持ち、ゆつたりと空き地をとつて建てられていた寺では、町中よりも類焼は少なかった。したがつて上層武士や公家は、親族や知人のいる寺に、戦乱を避けて身を隠したり、貴重品を預けていたのである。十市氏も十後の時代とその娘の時代に、英俊のいた興福寺の多聞院には、よく荷物を預けている。第六に、何よりも重視したいことは、英俊と十後の間に、手紙のやりとりや使者の往来が、月に何度もあつたことである。常に相手を気に掛け、思いやつて、自分で出かけたり、使用人を訪問させている。

このような知人への訪問を、中世の人は「見廻り」と呼んでいる。見廻りのネットワークは何重にも形成されていた。日常の見廻りネットワークの中で、人々は薬を都合したり、安否を確かめていたのである。専門の医師の診察を受けることが難しい一般の公家や武士、ましてや農民は、こうした智恵で、病気を予防し、初期に看護を始めていたといえるのである。

日本中世における病気の看病は、専門の医師にも頼れない人々が圧倒的多数であつたので、日常生活上、知人や親類の間で見廻りを繰り返すという行為でしのいでいた。そのため病気は早期に発見され、知人間で薬のやりとりをするという、智恵と工夫が、病に対処する安全策として、一般に採用されていたのである。

注

(1) 『医心方』丹波康頼著、政宗敦夫編纂校訂、日本古典全集刊行会、一九三五年、(現代思潮社、一九七八年復刻)。

(2) 『吾妻鏡』寛元三年二月条(『国史大系32』吉川弘文館、一九六四年)。

- (3) 『統史愚抄』(『国史大系』13、14、15 吉川弘文館、一九六六年)。
 (4) 新村拓 『日本医療社会史の研究』(法政大学出版局、一九八六年)、『日本医療史』(吉川弘文館、二〇〇六年)。
 (5) 『近世漢方医学書集成』2 曲直瀬道三 一(名著出版、一九七九年)。
 (6) 『女の民俗誌』(東京書籍株式会社、一九八〇年)。
 (7) 『中世の愛と従属』所収、(平凡社、一九八六年)。
 (8) 『天皇の産産空間―平安期・鎌倉期』(『岩波講座天皇と王権を考える』8 コスモロジーと身体 所収、(岩波書店、二〇〇二年)。
 (9) 『産産と生殖観の歴史』(法政大学出版局、一九九七年)。
 (10) 『産産の歴史―縄文時代から現代まで』(集英社、二〇〇二年)。
 (11) 『中世の産産―着帯・介添え・産穢を視座として』(『女性史学』16号、二〇〇六年)。
 (12) 『吾妻鏡』 寿永元年二月十四日、三月十五日条(『国史大系』32 吾妻鏡 吉川弘文館、一九六四年)。なお北条政子については拙書『幕府を背負った尼御台 北条政子』(人文書院、二〇〇三年)を参照していただきたい。
 (13) 『吾妻鏡』 寿永元年三月九日条。
 (14) 『吾妻鏡』 寿永元年七月十二日条。
 (15) 注(14)に同じ。
 (16) 『吾妻鏡』 寿永元年八月十一日、十二日条。
 (17) 『吾妻鏡』 寿永元年八月十二日条。
 (18) 『北野天神縁起絵巻』(小松茂美編 『日本絵巻大成』21、中央公論社、一九七八年)。
 (19) 『吾妻鏡』 寿永元年八月十二日条。
 (20) 『吾妻鏡』 寿永元年八月十四日、十六日、十八日、二十日条。
 (21) 保立道久 『中世の愛と従属』(平凡社、一九八六年)。
 (22) 『融通念仏縁起絵巻』(『新修日本絵巻物全集』別巻1、角川書店、一九八〇年)。
 (23) 『文保記』(『群書類従』五二三、統群書類従完成会、一九五九年)。
 (24) 「とはすがたり」(「とはすがたり たまきはる」『新日本古典文学大系』50、岩波書店、一九九四年)。
 (25) 田端泰子 『乳母の力』(吉川弘文館、二〇〇五年)。
 (26) 『吾妻鏡』 寿永元年十月十七日条。政子と頼家が御産所から當中に帰ってきたことである。比企尼は甥の能員と推参した。
 (27) 本論中の「比企氏略系図」参照。
 (28) 『御産所日記』(『群書類従』四二〇、統群書類従完成会、一九三〇年)。
 (29) 『御産之記』注(28)書。
 (30) 田端泰子 『女人政治の中世』(講談社現代新書、一九九六年)。
 (31) 『医師大膳亮守家』は丹波守家を指す。丹波氏はもと坂上姓で、侍医を勤め、その養子宗伯は徳川家康に仕えている。
 (32) 撫物とは、身体を撫でて、穢や禍などを祓い棄てるのに用いる紙製の人形または衣類などをいう。
 (33) 田端泰子 『胞衣おさめ』の項目(『部落史史料選集』第一巻古代・中世編所収、部落問題研究所、一九八八年)。
 (34) 『紫式部日記』伊藤博校注(『日本古典文学大系』24、岩波書店、一九九九年)。
 (35) 『御堂閨白記』(『大日本古記録』御堂閨白記』上・中・下、岩波書店、一九五二―五四年)。
 (36) 『政事要略』(『国史大系』28、吉川弘文館、一九六四年)。
 (37) 『延喜式』上・下(『神道大系編纂会』一九九一、一九九三年)。
 (38) 田端泰子 『戦国・織豊期の十市氏と十市後室の生活』(『日本中世女性史論』所収、塙書房、一九九四年)。
 (39) 『多聞院日記』辻善之助編(角川書店、一九六七年)。
 (40) 『後愚昧記』一一四(三条公忠著)、『大日本古記録』岩波書店、一九八〇―九二年)。